

* * * *

バッコヤナギ *Salix Bakko* Kimura とシライヤナギ *Salix Shiraii* Seemen との雑種を記載した。これは1957年5月筆者が那須の北温泉附近で見つけたものである。挿枝をとり、仙台で栽植して観察をつづけてきた。高さ約 16 m にもなる高木と、枝が横には広がるが高さは普通 1 m 内外という低木との雑種が、どんな樹形をとるか大いに興味をもって観てきたが、樹冠がほぼ平坦で、太い枝が開出斜上して横に広がり、高さ 3.5 m の低木になった。樹形は両種の間と言うのほかない。裸材に明瞭な隆起線の散在することや、苞が異色である点はバッコヤナギから来た形質と考えたい。花穂が葉と同時に現われ、苞の先端が円形で、腹腺体は黄色を呈し、子房の柄が完全に無毛であることはシライヤナギと共通である。成葉の大きさ、花穂と苞の形と大きさ、子房の形とその上半に僅かに細毛の散生すること、腹腺体の形と胚珠の数は両種の間と言えよう。花柱の長さはシライヤナギに近い。

□Harborne, J.B. & B.L. Turner: **Plant chemosystematics** 562 pp. 1984. Academic Press, London. \$95. 植物の分類または系統学への化学成分の適用, すなわち化学分類学 (chemosystematics) に関する総書である。これまで分類学に応用されてきた多くの二次代謝産物および高分子物質の植物界における分布, 検出方法, 分類学への利用が実例をもって示されている。全体は3章に分かれており, 特に第2章では二次代謝産物, 例えばテルペノイド, アルカロイド, 非蛋白性アミノ酸, ステロイド, フラボノイドなどの分類学への応用について, 地衣類のある種におけるデブンドの種内変異, アメリカ合衆国内におけるアカザ属植物でのフラボノイドの集団間差異, *Baptisia* 属 (マメ科) における多数のフラボノイドの属内における変化, ミカン科の亜科間におけるアルカロイド成分の変化, モミ属植物における雑種の形成とテルペノイド成分の分布など, 多数の実例とともに種内, 種間, 属間レベル, あるいは雑種形成による生体成分の変化と分類との関係が記されており, またこれら成分の違いを分類学のレベルでどう見るかも示されている。さらに, フィトアレキシンや石炭や化石に含まれる物質の同定と現存植物に含有される物質の比較にまで言及している。全篇にわたって従来, 化学分類学または化学系統学に適用された生体物質が実際の例とともにほぼすべて網羅されており, ただ単に化学系統学の利点を強調するだけでなく, その欠点も踏まえて今後の化学物質の分類学への応用に非常に有益な知識を提供してくれている。(岩科 司)